

わんでい おぶ ふみさん

「ひとりぼっちを助けてくれたあなた」

世界でひとりぼっちになるっていうことが、こんなにも寒いだなんて思わなかった。

降りしきる雨に、骨の髄まで冷やされた時の孤独感。誰にも助けられえず、帰ることができる場所も無く、ただ雨に打たれながら身を隠してじっと耐えることしかできない無力感が、こんなにも辛いだなんて知らなかった。

自分の獣耳と尻尾が、引きちぎってしまいたくなるくらいに恨めしく思えた。あの頃はまだ、見られないように隠しておくこともできなかったから。

お腹が空いて、身体に力が入らなくなつて、意識がぼんやりと薄れていつて。とうとう道の隅っこにうずくまつて、雨から身を守るように膝を抱えた。

ひとりぼっちが、怖かった。

このまま、ひとりぼっちで死んでしまうかと思うと、怖くてたまらなかった。

せめて、誰か一人くらい。

『……私に優しくしてくれたって、いいじゃないですか……』

理不尽で優しくない世界への恨み言が、お腹の中からこみ上げてきて。誰に向けられたものでもない、誰も拾ってくれない独り言を

零して、爪が食い込んで血が出そうなくらいに膝を抱えた時。

ふつ、と。私をずっと苛んできた雨が、何かに遮られた。

『あの……大丈夫、ですか？』

最初、幻聴だと思った。私を気遣う男の人の声。追い詰められた心が生み出した、私の耳のただけで聞こえる声だと思った。

『具合が悪いなら、救急車とか呼びましようか……？』

再び声をかけられて、これがやっと現実だと理解する。顔を上げる。私の頭上に傘をかざしながら、心配そうな表情でこちらを見つめる男の人。だがその表情は、私の頭に生えている獣耳を見て、すぐに驚きの色に変わった。

私の獣耳を見たこの人も、厄介事には関わるまいとすぐに逃げってしまうのだろう。見世物にするために、捕まえようとするかもしれない。あるいは、私を追い出した故郷の者たちのように、殴って蹴って、分かりやすく迫害するのもかもしれない。

ああ、それならそれで、いいかもしれない。見世物にされるのはちよつと嫌だけれど。見捨てるなら、それでもいい。殺してくれるなら、それでもいい。ここで苦しいのを終わりにしてくれるなら、それで。

傘を差しだしたまま固まる男をじっと見据え、次にどう行動するかを待った。

たっぷり十秒は使っただろう。男は、ぐつと喉に力を込めるような仕草を見せて。どの予想にも当て嵌まらないことを口にした。

『どこにも、帰る場所がなかったり、しますか』

それを聞いてどうするのだ、と返すのも億劫だった私は、ただ一度、こくんと頷いて返した。

『じゃあ、あの。よかったら……僕の家、来ますか。ここから近いんで』

『——っ』

目を見開いて、じっと男を見た。それを、否定的な反応だと捉えたのだろう。男は慌てて視線を逸らし、こちらが気の毒になるほど狼狽しながら言い訳を並べ立てた。

『いやあの、決してやましい気持ちからの申し出ではないというか、ぱっと見わけありつばいし、本当なら関わり合いにならない方が一番いいのかもしれないけれど、でも見て見ぬ振りするのも絶対に後で気になって後悔しちゃうだろうしで、だから帰る場所が無いんだつたら僕のためにも一緒に来て欲しいっていうか』

こちらが聞いてもいないのに、自分の思考回路を全て晒してくる男の様子を、最初は呆氣にとられて見ているばかりだった。

『身の安全は保証しきれないと思うけど……ああいや、そのつもりで連れていくわけじゃないですけど！ 僕、一人暮らしだから誰か他の人がいるってこともないし……ああそっか、一人暮らしだから余計に警戒しちゃうのか……！ ええと、あー、き、危害は加えません！ 大丈夫！ 信じて欲しい！ 会ったばかりの相手にこんなこと言われても信じられないかもしれないけれど……それでも、

ここで一人で雨に打たれてるよりはいいかなって！ 暖かい寝床と、ご飯くらいは用意できるので！』

裏表が無さそうどころか、裏を隠すことすらできなさそう。私のような、いかにもわけありの者を放っておけないと言いつ張り、人が良さそうなのが伝わってきて。そのくせ、さっぱり女の子と話し慣れていないことが丸わかりな感じが、段々と面白くなってしまつて。

『僕、これでも作家で！ まだ駆け出しですけど、僕と、もう一人くらいは生活できると思うんで、いつまでいてくれてもいいですし！ さっきも言いましたけれど、僕のためでもあるんで、後で請求とかは全然しませんし！ だから、あの、あー……よかったら、どう、ですかね』

最後には、なんだか——そんな彼が、一周して可愛く見えた。

『……ご迷惑で、なければ』

『ああ、よかった……うん、えっと、とりあえず、行きましようか。えっと……な、名前とか、聞いてもいいですか』

今にして思えば、とつても勇氣を出して声をかけてくれたのだと思う。挙動不審で、どもりながら、それでも必死に言葉を尽くしてくれていた。

そんな様子を見せてくれたから。私も、いいと思えた。

たとえこれが、私を騙すための何かだったとしても。それでもいいと、思えてしまった。

よろろと立ち上がる私に、自分が濡れることも厭わずに傘を傾ける彼が。私の中で、たまらなく尊い存在になってしまったから。だから——笑って、名乗った。

『文、です。衣笠、文。私の、名前、です』

『じゃあ、文さんですね……あ、ああ最初っから名前前で呼ぶの慣れ慣れしかなかったですかね、衣笠さんとか、あ、敬称も様付けとかの方がいいですかね!』

『……ふふっ。文さん、でいいですよ——先生』

『え、な、なんで先生?』

『作家さんってことは、先生でしょう?』

『あ、あ、そ、そっか、そう、ですよ。じゃあ、あの、はい。先生で』

肩を寄せ合い、相合傘で歩いてくれる、この人となら。私を拾ってくれた、彼と一緒になら。

『それじゃ、えっと……よ、よろしくお願いしますね、文さん』

『はい、先生』

もう少しくらい生きてみようかな、なんて。そう思えたのだった。結局、私は——そのまま、先生の家に「厄介になり続けて。お手伝いさん兼秘書みたいな役回り」で、雇ってもらって。

今でも、先生と共に暮らしている。

「……死にたい……」

PCに送られてきたメールを読んだ僕は、眉を顰めて、ぐいっと椅子の背もたれに背中を預けて天を仰いだ。大きく肩を落としてしまふ。メールの送り主は、僕の作品のあれこれを担当してくれている編集さん。僕が送った原稿に、いくつも書き込みが加えられた「デ」ータを添付して送られてきたメールは、あれこれと回りくどいことが書かれてはいたけれど。

要約すると——今回の原稿はボツ、という文意だった。

「あ……」

ずぶずぶと気分が沈んでいく。横に顔を向けて窓の外を見れば、街はすっかり夕暮れの色に染まって、ゆっくりと日を落としつつあった。僕は日が落ちると気分も落ち込みやすい。こんな状態で夜がやってくると考えただけで、ますます憂鬱になってしまふ。

「今回ののは、結構頑張ったんだけどなあ」

夕暮れ時なんていう、寂しい時間帯なことも相まってか、いつもより気分の落ち込み具合が加速していた。

静かな部屋。僕一人の状態で、頑張ったことを否定——それが編集さんの仕事だというのは理解しているのだけれど——されるような出来事が起きてしまふと。

なんというか、そう。

まるで、世界でひとりぼっちになってしまったみたい感覚。

ぶるつと身震いを一つして、怖い想像から身を守るように頭を抱えた、その時だった。

ばたばた、と。部屋の外、階下から上がってくる足音が聞こえてきた。

いつも落ち込みがちな僕を、心の沼から救ってくれる音。

きつと、今のところの人生で、僕が一緒にいる時間が最も長い人の足音。

それが聞こえてきただけで、沈んでいた気分が、ほんの少しだけ楽になったのを感じた。

ややあって、部屋の扉が控え目にノックされた。こんこんこんと等間隔に三回。真面目さと几帳面さが伝わってくる、不快さを与えまいとする気遣いが感じられる所作。

次いで聞こえてきたのは、とても綺麗な、銀の鈴を鳴らしたような澄んだ声だった。

「先生？ 文です」

ああ、僕の家で住み込みで働いてくれていて、お手伝いさんの声。僕の――本人に面と向かってそう伝えたことはないけれど――大切な人の声。

「どうぞー」

「失礼します……わ、わ、見るからに落ち込んでますね」

深い緑青色の大きな瞳。銀縁の丸眼鏡がよく似合う、少しだけ幼さを残したかんげ。血色の良い頬。僕の様子を気遣うように首を傾げるその姿がより魅力的に見えた。

僕より二回りほど小さい背丈。肩までかかる亜麻色の髪を、後ろと両サイドで何房か結わえた赤のリボンが、外から差し込む夕日の中できらきらと輝いている。

桜の花が裾にあしらわれた、淡い桜色の着物姿。下はダークブルーのスカート。その上から、清楚さと幼気さでいっぱいのエプロンを着込んでいる。大正浪漫が教科書からそのまま飛び出てきたかのような給仕服だ。

何より目を惹く、頭頂部から生えた髪色と同じ色の獣耳。身体の後ろからびよこんとはみ出た、ふわふわの尻尾。

全体的にふわふわとした雰囲気を持ち、人間のそれとは少しだけ違う見た目をした彼女は、この家のお手伝いさん兼秘書――衣笠文さん。

昔に見つけて以来、この家の家事をしてくれたり、たまに仕事のスケジュールを管理してくれたりして僕を支えてくれていて、頭が上がないくらいにお世話になっている女性だった。

「うん……ちよつとね……」

「お仕事で何かありましたか？」

「……原稿がボツになっちゃった……文さんが来てくれなかったら首を吊ってたかもつくらくらいには、落ち込んでる……」

「もう、またそんなこと言つて。お腹が空いているから考えも悪い方に行っちゃうんですよ。ご飯にしましょう?」

そう言つて、胸の前に小さな握りこぶしをぐつと作つて僕を鼓舞する文さん。その可愛さに今日もほっこりしつゝ、重い腰を上げた。

「ほらほら、今日は先生の好きな唐揚げたくさん作りましたから! 冷める前に、はやくはやくつ」

「わ、わ、押さないで押さないで」

「それそれーっ、ご飯食べて、元氣出せーっ」

「出す、出すから押さないで」

楽しそうな文さんに背中を押されながら歩く。足をもつれさせながらも、さつきよりしゃんと背中を伸ばすことができた。

給仕服のケモ耳ケモ尻尾お手伝いさんとの、二人暮らし。

僕たちの日常が、今日もまったりと過ぎていった。

作家と名乗るようになって、こうして一軒家を買ひ、どうにか二人で暮らして行けているということは、それなりに成功はしている方なのだと思う。

だが僕は、人一倍メンタルが弱い。……うん、自覚はある。事あるごとに落ち込むし、読者からの心ない一言をSNSで目撃しては落ち込むし、編集さんからの何気ない一言に引っかかつてはぐるぐ

ると考え込んで勝手に落ち込む。落ち込んでない日の方が少ないのではないだろうかと思ひ至り、そんな自分に嫌氣が差してまた落ち込む——そんな人間である。

そんな僕をいつも支えてくれるのが、文さんだ。

「先生? 背筋、曲がつてますよ」

「はい……しゃんとします……」

「はい、えらいです。えらい先生には、豚汁の具を多めにに入れてあげちゃいます」

「わあい……文さん優しい……」

台所に隣接したダイニングのテーブルに座ると、文さんがばたばたとスリッパを鳴らしながら給仕をしてくれる。僕の目の前に、炊きたてのほかほかご飯、具材たっぷり生姜多めの豚汁、大皿いっぱいには作られた鶏の唐揚げ、これまた山盛りのシーザーサラダが手際よく並べられた。

「先生、ご飯は何盛りですか?」

「大盛りで……」

「落ち込みながら大盛りの要求は新鮮でいいですねえ」

「死にたいくらいに落ち込んでるけれど、文さんのご飯は死んでも食べたい」

「嬉しがつていいのか分からないこと言うのやめてください」

美味しそうな夕餉を前にしてもなおテンションは暗いままの僕の対面に文さんが座り、にこにこ笑いながら手を合わせる。僕の方

が背は高いはずなのに、こうして対面すると文さんの方がずっと大きく見えるから不思議だ。猫背かそうでないかの違いだろうか。

「いただきますっ」

「いただきます……」

僕と文さんのふたり暮らしは、基本的に自由で束縛の少ない毎日だ。その中で、数少ない決まり事がこれである。

「はあ……豚汁美味しい……なんだかんだでお腹空いてた……」

「あはは、先生はいき食べ出すともしゃもしゃ食べてくれるのが見えて気持ちいいですね」

「文さんのご飯が毎食きちんと美味しく助かるよ」

ご飯は必ず、一緒に食べる。対面で座って、二人合わせていただきますをする。どうしても外で食べてくるような時には連絡を必ず入れる、等。食事に関する決まり事だけは、しっかりと守られていた。ほとんど家にいる文さんとはともかくとして。作家という仕事柄外に出ることも多い僕も、余程のことが無い限りはこうして文さんと一緒にご飯を食べる。

「こないだも、出版社の会食で外で食べたけどさあ」

「先生つたら、帰って来るなりご飯作って泣き付いてきましたもんね」

「文さんの作るご飯に、すっかり舌が慣れちゃってさ。このご飯じゃないと食べた気がしなくて」

「褒めてます？」

「褒めてる。とっても」

「受け取っておきます♪」

褒め言葉に表情を綻ばせながら、ご機嫌で唐揚げを頬張る文さん。うーん、可愛い。ケモ耳も相まって、もきゅもきゅと口を動かすその姿はハムスターとか小動物系の印象を与えてくる。こうして相對してご飯を食べていると、そんな文さんから元気をもらえているように。ネガティブな僕も、人として生活する上で支障が無いくらいには明るくなる気がした。

「文さん、おかわりください」

「はい、もちろん。大盛りでいいですか」

「お願いします」

「……先生の稼いで食べているご飯なのに、私がお願いされるのもおかしい気がしますね？」

「いくら僕が稼げたとしても、こんなに美味しいご飯は文さんがいないと食べられないから。だから、お願いします」

「……ふふっ。お手伝いさん冥利に尽きますねえ」

明るさを取り戻すと、もりもりと食欲も湧いてくる。元気になるために食事は必要不可欠だろうけれど。あらかじめ、ある程度の元気が無いと食事だって喉を通らない。

人としてなかなか致命的に「元気を無くすことも多い僕にとって、文さんがくれる『食事するための最低限の元気』は、冗談ではなく生命線の一つなのだった。

だが——今夜はどうにも、間が悪いというか。文さんがくれる元
気だけでは、僕のネガティブな心境は払拭しきれなかったようだ。

「はあ……」

「あ、またため息」

「ご、ごめん、食事中に……」

食欲に任せて進む箸とは反対に。食事の合間合間に、僕の口から
は深い溜息が幾度となく吐き出された。

「いえ、私は構わないのですが。今回は、輪をかけて落ち込みます
ね、先生」

「うん……」

「やっぱりあれですか。さっきボツになったっていう原稿が」

「うん……今回は結構自信があった分、余計に……」

「作家さんは大変ですねえ。私は、前に先生が出した新作も、とっ
ても楽しく読ませていただいたんですけれど」

そう。文さんが支えてくれているのは、僕の身のお世話
家事だけではない。僕のスケジュールを管理してくれることもある
だけでもない。

僕が作り出したお話を読んでくれて、とてもよかったと微に入り
細に入り感想を直接述べてくれる——僕の一番のファンとしても、
作家としての僕を支えてくれているのだ。

「読者としての私の意見を述べさせていただけなら」

「拝聴します」

「先生は、落ち込んで悩めば悩むほど、とっても良いお話を書いて
くださるので、これは良い兆候にしか見えません」

「うう……文さん厳しい……」

「まあまあ。先生が頑張って書いたお話、次もまた一番に読んで感
想お伝えさせてもらいますから。だから、ね？ がんばりましょ？」

「うう……文さん優しい……好き……」

「はいはい。私も、先生がちゃんと背筋を伸ばしてご飯を食べてく
れたら好きですよー」

「がんばる……」

お手伝いさん兼、秘書兼、熱心な読者。

作家にとって、こんなにありがたい存在があるだろうか。

「ごちそうさまでした……」

「お粗末様でした。先生はやっぱりよく食べますねえ。作りがい
あって、私も嬉しいです。お腹が落ち着いたら、先にお風呂入っ
ちやってくださいな。入浴剤も使ってリラックスしたら、落ち込ん
でのもきつと吹っ飛んじやいますから」

しかも、文さんは、それだけじゃないのだ。

こうして、家事をしてくれたり。落ち込みがちな僕の背中を叩い
てくれるだけではありません。

「……ねえ、文さん」

「はい？」

「今夜、さ。『いつもの』——して、もらえないかな」

文さんは——定期的に、僕と『いつもの』をして、ストレスを取り払ってくれる。

「……い、いつもの、ですか」

「うん。だめ？」

これも、僕にとっては生命線の一つだ。ふとしたことで地に落ちてしまう自己肯定感を維持するために、とつても大事なこと。

「だめでは、ないですけど……せ、先週もしたじゃないですか。もう少し間を置いた方が、いいと思いますけれど」

「今夜、さletたいんだ」

「お疲れでしたら、普通に寝た方がいいと思いますけれど……」

「文さん、僕がこうなったらなかなか寝付けなくなっちゃうの知ってるでしょ。どうせ起きちゃうならって、無理して仕事しちゃうだろうから……それなら、文さんにいつものしてもらって、気持ちよく眠りたいから」

「……わかり、ました。それじゃ、あの。十時になったら、いつものお部屋に、どうぞ。私も……準備、しておきますから」

頬を朱に染め、恥ずかしそうにもじもじと俯く文さん。無理もない。僕だって『いつもの』をされている時のことを思い出すと、恥ずかしくて変な表情になってしまう。

でも——やっぱり、嬉しい。

文さんが、僕に『いつもの』をすることが嫌ではないことが、嬉しい。

「ありがと。よろしくね」

「は、はいっ。今夜もたくさん……」

——私が、癒してあげますね、先生。

僕たち二人の日常。その中の、ほんの少しの非日常が。今夜も、僕のことを癒してくれる。

数時間先の出来事を期待して——僕の身体の奥が、ほんのりと疼くを感じた。

僕たちは、恋仲ではない。付き合いは随分長くなったけれど、そういう関係には発展していない。

たとえば、僕が文さんの着替え中に部屋の扉を開けてしまつて、意外に『ある』文さんの半裸を目撃してしまつたりだとか（悲鳴を上げられるとかではなく、羞恥でその場にうずくまつてすんすん泣かれてしまつて、申し訳なさすぎて土下座して謝り通した）。

たとえば、僕が腕を怪我して動かせなくなった時、身の回りの世話を文字通り全て文さんにしてもらつたりだとか。そういうことは、何回かあったけれど。

でも文さんは、僕に対してそういう感情は持つてはいないと思う。

僕の方は……僕自身も、よくわかっていない。ただ、ひとりぼっちだった時に救った恩義からこの家にいてくれているであらう文さんに対して、そういう浮ついた感情で接することは、なんとなく不誠実だという気がしている。

だから僕たちは、そういう色めいた関係ではない。
ない、のだけれど。

「……よし。今夜も、たくさん癒されよう……」

ご飯を食べ終え、お風呂を済ませ、歯を磨き終え、仕事のあれこれも急ぎのものが無いことを確認し終えた夜。

寝間着に着替えた僕は、文さんが言っていた十時にふらふらと自室を出て一階へと下り、離れの和室へと向かった。

六畳ほどのそこは、普段はほとんど使わない部屋だ。緊急時の客間のような扱いで、文さんがこの家に来るまではほとんど物置として使っていたつけ。

だが、文さんが来てからは。僕たちの生活の中で、とつても大事な役割を担う部屋となっていた。

襖の引き戸。隙間から、うつすらと灯りが漏れている。中に、文さんがいる。それを理解しただけで、頭が、身体が、はやく中に入つて欲求を満たせと悲鳴を上げるのが分かる。

本能が、求めている。

文さんがくれる癒しを、求めている。

「文さん？ 僕。きたよ」

声をかける。中から、すぐに猫の鈴を転がしたような、可愛らしい声が返ってくる。

「お待ちしておりましたよ、先生。どうぞっ」

期待で心臓が高鳴るのを感じながら、逸る気持ちを抑えて、乱暴にならないように引き戸を開けた。

そこに、僕だけの天国があった。

「さあ先生、こちらへどうぞ。今夜も私が……一晩かけて、先生のことをお癒ししてあげますからね♪」

給仕服を着替え、寝間着代わりに使っている白無地の一重姿になった文さんが、敷いた布団一式の上に正座し。枕元に置いた、行灯型のランタンが発する暖色の照明に染められて。

その手に——小ぶりの耳かき棒を持って、ちょいちょい、と手招きしてくれている。

この光景だけで、まるで産湯で温めた手でそつと心が掬われたかのように、じわつと身体が温められた気がした。

これが、文さんが定期的にくれる癒し。

離れの和室を使って、徹底的に僕の自己肯定感を高めてくれる特別な時間——膝枕耳かきの時間である。

引き戸を閉める。この和室が、世界が切り離される。僕と文さんだけの静かな空間が出来上がる。ふかふかの布団の上に、ぼすんと飛び込んで。文さんのお腹側とは反対を向いて、彼女の膝枕に頭を置いた。

すかさず僕のお腹のあたりにタオルケットをかけてくれる気遣い
がありがたい。それ以上に、膝枕のふかふかすべすべ感触が心地良
い。文さんのシャンブーの香りとお日さまみたいなほかほかが混ざ
り合った匂いで癒される。何より、膝枕に頭を載せてもいいのだと
いう『許されている』感が、ぼこぼこに打ちのめされていた僕の自
己肯定感をじんわりと温めてくれていた。

「はああ……」

「ふふっ。先生は、膝枕に寝転がると良い反応をしますね」

「ふかふかで、すべすべで、いい……うん、いい」

「今、いい匂いって言おうとしたでしょう」

「うぐ、」

「もう。あんまり大っぴらにくんくん嗅いでると、ほつべたべちん
つてしちゃいますよ?」

「失礼しました……」

「素直に謝れてえらいです♪ それじゃ、始めますよ。まずはいつ
もの……お耳のお掃除から」

文さんが、枕元に用意していた洗面器に手を伸ばす。お湯が張ら
れたそこから、タオルが一枚取り出された。

文さんがタオルを絞る。ちゃぷちゃぷ、たばたば、ぴちゃん、ぴ
ちゃ——静かな空間に立つ水音が耳を楽ませしてくれる。この癒し
の時間は、全ての音が僕を癒してくれる時間だ。文さんが立てる衣
擦れの音や、僕の息遣いすらも。

「最初は、お耳拭きです。お耳を温めながら、大きな汚れを拭いて
いきますよー……ぼふっ、と」

「はああああ……」

さつきよりもさらに深い溜息を吐きながら、耳が温められる感覚
に身を任せる。耳にはたくさんのツボがあるらしい。そこを温めら
れるだけで、全身がぼかぼかになっていく。

「ごし、ごし、ごし……耳たぶ、ちょんつて摘まみますから。痛か
つたら言ってくださいね?」

「……」

「先生?」

「っ、あ、ごめん、なんて?」

「……ふふっ。いえ、なんでもありません。気持ちいいのだけ感じ
て、私にぜんぶ任せてくださいね……ごし、ごし、ごし……♪」

文さんの綺麗な声と一緒に耳を暖められると、全身が癒しに浸さ
れて、何をする気も起きなくなる。そんな状態でかけられる『私に
全部を任せてください』は、途方も無い多幸福感を生み出してくる
のだ。

「先生、呼吸が深くなってきましたね。いいですよ、そのままちょ
っとだけ、深呼吸してみましか。私の声に合わせて……息を、
吸って……」

「すー……」

「吐いて……」

「はー……」

「もう一度吸って！……イメージでいいですから、全身に酸素が行き渡るのを意識してくださいねー……」

何かを決める、決断することは、人間にとってストレスを生む行動らしい。それを全て捨て去って、信頼している相手に委ねてしまうことの、なんと心地良いことか。

「吸ってー……」

「すー……」

「吐いてー……」

「はー……」

「……はい、呼吸を元に戻してください。お膝に伝わってくる重さで、先生がとってもリラックスしてるって分かります。くたーってしてくださいね。その状態で、お耳と、私の声だけに集中してくださいねー……ごし、ごし。ごしごしごし……」

もう、意識がぼんやりとしている。文さんが拭いてくれている耳だけが気持ちよくて、僕の意識が耳だけに宿ったように錯覚してしまふ。

だが、本命はあくまでも耳かき。

文さんのお耳拭きは、ただの準備段階だ。

「……っ、文、さん、あのっ……」

「ふふっ。どうしましたか、先生？ お膝の上で、もぞもぞしちゃっつて」

少しだけ嗜虐的な色を湛えた文さんの声に、膝枕の上でますますもぞもぞと悶えてしまふ。

耳が、痒い。耳の奥深くに至るまで、先ほどまではなんともなかったはずの耳穴が異物感でいっぱいになっている。

これが、文さんの癒し膝枕耳かきの第一段階。耳をタオルで暖めて汗をかかせ、耳垢を浮かせて取りやすくするのだ。

だが当然、それを耳かきで取り除くまでは耳垢が浮いたままなわけ。僕の耳がこんなにも汚れていたのかという羞恥も相まって、膝枕の上で芋虫のようにもぞもぞとしてしまふ。そんな様子を、今、この瞬間に文さんに見下ろされているかと思うと、一周して背徳的な快感すら覚えてしまいそうなほどに恥ずかしい。

「い、意地悪しないで……はやく、してよっ……」

「……っもう、先生そんなに可愛い声を出さなくてもしてあげますから。わかっておりますよ。おまかせください。先生の疲れも、悩みも……私の耳かきで、ゼーんぶ塗り潰してあげちゃいますからね」
いきますよー、という声と一緒に。無造作に、耳かき棒が耳穴の手前にすつと挿入されて。

——かり、かり、かりっ。

文さんの声と一緒に三回、耳穴の壁が、搔かれた。
「は……ああああああ……」

あまりの気持ちよさに、目を閉じて情けない声を上げてしまう。だが、この気持ちよさには逆らえない。痒くて痒くてたまらなかつたところを、耳かき棒の鉤で優しくかりかりとされる気持ちよさ。口が半開きになって、まるで情事の最中に攻められたかのような声が垂れ流された。

「ふふっ。先生のお耳は、とっても素直ですね。先週もしてあげたのに……ほら。かり、かりかりっ……っただけで、たくさん耳垢が取れます」

「あ……っ、あ、あ、あっ……」

「そのまま、じっとしててくださいね。気持ちよくなることだけ考えて……私の声と耳かきだけ、感じてください」

至福の膝枕耳かきが、始まった。

——かり、かり、かり。かりかり、かりかり……♪

気持ちよすぎて、少しだけ怖くなる。このまま耳が蕩けて無くなってしまうんじゃないかと怖い妄想をしてみましょう。怖くなって、思わずきゅっと文さんの一重の裾を握った。文さんは、それを咎めるでもなく、ただくすくすと笑って、僕の頭をぼんぼんと叩いてくれた。大丈夫ですよ、怖くないですよ、気持ちいいことだけ感じてください——そんな声が頭の中に直接伝わってくるかのような、優しい手付きだった。

——あ、ここに少し、しぶとい塊がありますね。ほら、これです。分かりますか……？ こっ、こっつて言ってます。これを……こりこり、こりっ……ずぞっ、ずぞぞぞ……つと。はい、取れました。周りの細かいのも、やっていきますよ……かき、かき、かきかきかき……

文さんの耳かきは、必ず擬音の囁き声と一緒にされる。やってやっつと僕がお願いしているうちに当たり前になったものだ。元々、そういう音声作品が好きだというのもあるのだけれど。

僕は、文さんの声が大好きなのだ。

——かり、かり、かりっ……耳穴の手前、面白いくらいに取れますねえ。本当に、耳かきし甲斐のあるお耳です。ほら、ここ。くぼみのところを重点的に……こき、こき、くりくりくりっ。あははっ、気持ち良さそうな声がまた出ましたね。耳かきされている先生は、肩をびくびく言わせて反応してくれるのが、可愛いです……

透き通っていて、綺麗で、耳によく響く声。こうして耳元に口を寄せて、こしょこしょと内緒話をするかのようなポリウムで囁かれると、その綺麗さが際立って聞こえてくる。この声をすぐ側で聞かせてもらえるだけで、耳かきの癒しは何百倍にも膨れ上がって、僕の頭を癒しの甘さで痺れさせてくれる。

——先生、お耳に息を吹き掛けますよ。びっくりしないでくださいね。いきますよー……ふー……つ、あ、あ、びくびくって震えて……よし、よし。だいじようぶ、だいじようぶ。怖くない、怖くない。頭、ぼんぼんってしてあげましょうね。ぼん、ぼん……ぼん、ぼん……落ち着きましたか？ それじゃ、もう一回……ふー……つ、あ、あ、またびくびく……あははっ。先生ってば、本当に身体は正直ですね。

この耳吹きも気持ちいい。文さんの吐息が細かい耳垢を吹き飛ばしてくれるたびに、僕の身体がびくびくと反応する。こうされると、頭の中が真っ白になって、本当に文さんの吐息が僕の疲れも悩みも全て吹き飛ばしてくれているような心地になる。

——かりかり。こり、こり。くり、くり、くり……ふーっ。ふっ。ふっ。ふー……つと。気持ちいい、気持ちいい、です。きもちいい、きもちいい……かり、かり、かり。こりこりこり……つてされるたびに、きもちいい、きもちいい……♪ 先生のお耳が、癒しでいっぱいになってますよー……

ああ、これこれ。この感じ。

文さんの声が、僕の気持ちよさまで支配してくれている。

——きもちいい、きもちいい……こりこりこりってされるたびに、きもちいい……ふー……つて息を吹かれるたびに、きもちいい……

文さんが気持ちいいと言ったたびに、気持ちいい。

文さんがこりこり、かりかりと囁くたびに、気持ちいい。

文さんが僕にしてくれる全部が、気持ちいい。

——奥の方も、ちょっとだけやりましょうか。じつとしてくださいねー……かりっ、かりかり、かりっ。あ、あ、すごいですね、先生。ざり、ざりって言ってます。溜まった粉状の耳垢が、かりかりするたびに、ごそごそーって取れちゃいます。私も、耳かきしていて楽しくなっちゃいます。

耳穴の奥をかりかりされる気持ちよさが強すぎて、一周して意識が少しはつきりとする。目を開けてみる。暖色照明に包まれた和室がそこにある。視線を少しだけ移動させると、僕に膝枕をして、真剣に、丁寧な手付きで耳かきをしてくれている文さんの影が壁に映し出されている。

なんだか、そういうお店で癒されているかのような特別感だった。癒し処、っていうんだっけ、こういうの。ああ、文さん、そういうお店で働いていてもきつと似合うんだろうな。

——ざり、ざり。ざり、ざり。しよりしより、こしょこしょ……
きもちいい、きもちいいですね……先生のお耳を気持ちよくするの、
私も楽しいです。こりこりこり……かり、かり、かりかり……
気持ちいい、きもちいい……♪

ああ、でも。文さんはやっぱり、僕のお手伝いさん兼秘書さんで
いてほしいな。

こんなに気持ちいい耳かきしてくれる人、他の誰にも渡したくな
い。……なんて考えを口にするのはあんまり良くはないだろうから、
言わないけれど。

「……よし。こっちのお耳は、こんなものでしょうか。先生？」

「……………ふあい……………」

「こっちのお耳は終わりましたから。反対側のお耳を向けてくださ
いな」

「……………ふあい……………」

「あ、あ、弱った魚みたいになってる……ごろんてしますよ、先
生。いきますよ……ごろんっ」

「んう……………」

文さんに手伝ってもらって、どうにか寝返りを打つ。文さんのお
腹側。最初の頃は、こっち側を向いて膝枕してもらうことも恥ずか
しかったっけ。

しかし、ううむ。

こっち側を向くとやはり——

「こらっ」

「いでっ」

べちんってされた。

「先生、今くんくんって匂い嗅いだでしょう」

「はい……………」

「べちんってしました」

「されました……すいません、もうしませんでした」
「まったくもう。……こほん。気を取り直して……こっち側も、ま
ずはお耳を温めていきますよ……………」

ごし、ごし、ごし。反対側の耳も温められる。お腹側を向いてい
ると、自分の吐息で顔面が暖まってくる。ぼーっとしてくる。文さ
んの一重を僕の息が湿らせているかと思うと、少しだけドキドキも
する。

耳がまた痒くなってくる。もそもぞしようとしても、耳かきです
っかり骨抜きにされてしまった僕の身体はさっぱり動かさなくなっ
ていた。

そして——人間の身体は動かさなくなると、不思議なことに意識
を手放そうとするものらしい。

「……あ。先生、だいぶ眠くなってきましたね」

「……わかる、の？」

「先生は眠くなってくると体温が上がってきますから。……いいで

すよ、いつ寝ちゃっても」

寝てもいいと言われると、途端に眠気が加速してくる。

必死に抗う。せっかく文さんが耳かきしてくれる至福の時間なのに。眠ってしまったのは、もったいない気がしてしまう。

でも文さんの癒しには、到底勝てない。

だって、文さんが僕にくれる癒しは、ここからが本番なんだから。そう。耳かきは、あくまで手段で。

この癒しの目的は、僕の自己肯定感を高めることなのだ。

——よし、よし。いいこ、いいこ……

ああ、始まった。

僕の何もかもを肯定して、甘やかしてくれる時間。

——先生。先生。せんせー……

呼んでくれている。僕のことを、すぐ側で。僕の大好きな声で、

呼んでくれている。

——いいこ、いいこ、いいこ……よしよしよし。えらい、えらい……いつも頑張ってる、えらい。毎日、毎日、生きててえらい。一番側にいる私が、ちゃんとしていてますからね。先生は、とっても

えらい、いいこですよ……

一番側にいる私。ああ、そうだ。文さんは本当に、僕と一番一緒にいてくれる人。

その人が、僕を認めてくれている。

いいこ、いいこ。

えらい、えらい。

そう囁いては、僕が生きていることを肯定してくれている。

——かり、かり、かり。こり、こり……こっちのお耳も、たくさんたくさん気持ちよくしてあげます。気持ちよさに身を任せて、そのまま眠っていいんですよ……

こっち側の耳も、耳かきが始まった。気持ちよさが耳穴から脳の奥の奥まで浸してくる。考えられなくなる。今日起こった嫌なことも、未来への不安も、痺れた頭の中で塗り潰される。

——先生が気に病むことも、落ち込むことも、私の膝枕の上では何もありませんからね。よしよしよし。いいこ、いいこ。なで、なで、なで……あ、口元がちょっとだけ綻んだのが見えましたよ。これがいいんですね、先生？　たくさん、かりかりしながら……なで、なで、なで……♪

頭が無でられる。文さんに、撫でられてる。気持ちいい。許されてる。膝枕耳かきされながら、なでなで、よしよし、いいこいいこされてる。

——先生は、いつも頑張ってます。えらいです。私、いつもすごいって思ってます。先生は、すごいんです。えらいんです。だから私の膝枕の上でくらは、甘えちゃっても、いいんです……

大人になると、褒められることは少なくなる。できて当たり前でできないことはいけないことで、できなかった者たちは落ちていつてしまふ。

でも、僕は。僕には、こうして褒めてくれる人がいる。僕がこうして『生きている』ことを褒めてくれる人がいる。

——なで、なで。甘えちゃって、いいですよ。

生きていることを認められることが、こんなにも暖かいことだなんで、知らなかった。

——いいこ、いいこ……よしよし、よしよし。私が、お側にずっといますよ。

側にいるよ、と言ってくれる人が甘やかしてくれることが、こんなにも幸せだなんて、知らなかった。

——かり、かり。くりくりくり……私も、先生に甘えられるのが、とつてもとつても、幸せです……♪

僕が甘えることが幸せだと言ってくれる人が、僕の大好きな人だということが、こんなにも嬉しいことだなんて、知らなかった。

「……ふみ、さん……」

ぎゅうつと文さんの一重の裾を握って、最後の力を声帯にこめて振り絞る。蚊の鳴くような声しか出なかったけれど。文さんの可愛らしいケモ耳は、こんな僕の弱々しい声さえも、しっかりと拾ってくれた。

「どうしましたか、先生」

「……」

「んー？」

文さんが、上体を屈めて耳を寄せてくれる。

呼ぶだけ呼んで、何を伝えたいのかさっぱりまとまっていなかったけれど。

「……いつも、ありがとね……」

結局出てきたのは、ありきたりで、いつも伝えている感謝の言葉だけだった。

でも文さんは、それを聞いて。

「……はい♪ こちらこそ、いつもありがとうございます、先生っ」
ほんのちよつとだけ、ぎゅうつと僕の頭を抱き締めてくれた。

その一瞬の暖かさで満足したのか。僕の意識は、とうとう、完全に落ちたのだった。

これで終われば、僕だってもう少し生きやすかったと思う。
でも、僕という生き物は、本当に弱つちい生き物なのだ。

「……ん……」

「あ。先生、やっぱり起きちゃいますね」

文さんに、どれだけ疲れと悩みを塗り潰してもらっても。心の奥底では、今日あった悲しい出来事が澱のように積み重なっている。それが、僕の睡眠を妨げて、焦りと不安を生んで、一時間もしないうちに目を覚ましてしまうのだ。

「……」——そんな弱い僕すらも。文さんは、受け入れて、許して、褒めてくれる。

「よしよし。いいこ、いいこですよ先生。ほら、目を閉じて……」

「ん……ごめんね、文さん……」

「いえいえ。また眠るまで、私がいいこいいこしてあげますからね
——」

耳かきはとくに終わっていたらしい。姿勢を仰向けにされる。文さんが僕を見下ろすのと目が合う。

ああ、笑ってる。すっごい優しい表情。ケモ耳がびこびこ動いてる。可愛い。

そんな彼女が、僕の頭を撫でながら、肩をとん、とん、とん、と等間隔に叩いて寝かしつけてくれる。

「いいこ……いいこ。なで……なでっ。とん、とん、とん……よし、よし、よし……安心して、眠っていいんですよ……」

これが、文さんの癒しの、本当の本番。

眠れない夜。何度起きても、寝かしつけてくれる。

膝枕で、何度だって甘やかしてくれる。

「……ふみ、さん……」

「はあい♪」

「……ぐう……」

「……おやすみなさい。何度起きても、寝かしつけてあげますからね……」

数分の睡眠と覚醒を繰り返す。うなされていれば、文さんが優しく揺り起こしてくれる。そして、だいじようぶ、だいじようぶ、と言いつけながら、またよしよしと頭を撫でてくれる。

「よし、よし、よし。いいこ、いいこ。いいこ。いいこ。先生は、いいこですね……生きてて、とつても、えらいですね……♪」
目を覚ます。文さんが穏やかに僕を見下ろしているのが見える。

安心する。また眠る。

そうしているうちに、身体が覚えていく。

たとえ眠れなくても。何度起きても。

そのたびに、文さんがよしよしと頭を撫でては寝かしつけてくれる。

心配することなんて何も無い。今夜だけは、安心してゆつくりと眠っていい——身体が、そう記憶する。

「……んう……」

「あ、また起きましたね。だいじょうぶですよ……先生、いいいいいですよ……」

何回、そうして寝かしつけられただろう。多分、回数にすれば四回目か五回目くらいだったと思う。寝汗をかいていたのか、文さんがタオルで僕の額を拭いてくれているところで目を覚ました。

お湯はすっかりぬるくなってしまっていたけれど。濡れたタオルで額を拭かれる気持ちよさで、起きているのか眠っているのか曖昧になっていた意識が、少しだけはつきりとしていた。

「ふみ、さん……」

「はあい？」

「いつも、ありがとね……」

「あはは、さっきも言われました。私も、同じ風に返しますよ？」

……こちらこそ、いつもありがとうございます、先生♪」

「……文さんはいつも、僕を助けてくれるから」

「はい？」

「いつも僕が、ひとりぼっちになっている時……文さんが、声をかけてくれる、から」

「——っ」

僕がもう少ししっかりと目を覚ましていれば、文さんが息を呑んで目を見開いたことに気付けたかもしれない。

「今日も僕、部屋でひとりぼっちだった。お話を書いているとね。世界から、つまはじきにされたみたい……この世の誰も、僕の味方してくれないんじゃないかと、そういうことばかり考えちゃうんだ」

「……」

「そういう時に、いつも声をかけてくれるのが、文さん、なんだ」ひとりぼっちになって、編集さんからのメールを見た時。本当に、死んでしまいそうなほど落ち込んだ。

だって、あの瞬間——僕は、世界で一人だったのだから。

「だから、ありがと。文さん」

「……せん、せい」

「これからも、よろしくね……ぐう……」

再び、意識が落ちる。文さんのなでなでの気持ちよさと、膝枕の柔らかさに包まれながら。世界一幸せな深い眠りへと飛び込んでいく。

今度は、朝まで目が覚めなかった。

文さんのおかげで、僕は今日もぐっすりと眠ることができた。

明日からも、頑張って生きていこう——そう思えることが、できたのだった。

すう、すう、と穏やかな寝息を立てている先生を見下ろしながら、熱くなった目頭から涙が零れないよう懸命に耐える。

泣いてしまったら、先生の顔にぼたぼたと垂れてしまうから。やつと深く眠ってくれたのに、再び起こしてしまうのはあまりに忍びない。

「……本当に、もう。先生は……」

驚いた。私が、先生に拾われた時のことを思い出さずにはいられなかった。

故郷を追われて、どこにも行き場が無くなって。世界で一人ぼっちになって、雨の中で膝を抱えて蹲ることしかできなかった私に。

先生は——手を差し伸べてくれた。

ああ、今でも覚えてる。先生の、さっぱり女の子と話し慣れていないことが丸わかりな、おどおどとした態度。

でもその言葉には、こちらが言葉に詰まるほどの誠実さと。ずつと溜め込んでいた涙の堰が切れてしまうほどの優しさが、詰まっていた。

「最初に、ひとりぼっちに声をかけてくれたのは先生じゃないですか、もう」

何もかも、先生がくれた。

この人が生きてくれたから、私も生きていけたのだ。

私の命は——この人に、生き長らえさせてもらった物なのだ。

私の一生は、この人の物だと。

膝枕の上で、穏やかに寝息を立てている先生の物だと、思い定めたのだ。

「……ふふつ。よし、よし。先生は、よく頑張ってますよ……」いつも、冗談めかして返してしまっけれど。

本当は。あなたに、返しきれないくらいのご恩を、感じているんです。

暖かいお布団。文字の読み書き。先生のお世話という生きがい。

「……生きていて、えらい。本当に、えらいんですよ、先生。生きていてくれて、ありがとうございます、先生……」

全部——この人が、くれたんだ。

この人がくれたものを、どれだけかかってもきつと返すと決めた。この人に尽くすと、決めた。

あなたがいつか、誰かと結婚したりして。素敵な人と一緒になって。私がお役御免になるその日まで——

「……っ、んん？」

耳かきする手を止める。なんだろう。先生が誰かと結婚して幸せな家庭を築く姿を想像した時。

何か、こう、胸のあたりがチクツと痛んだような——

「……ううん。まさか、ね」

胸の痛みの原因は何なのか、探ろうとする心を自制する。

先生の寝息の生温かさを感じるだけで、いいと思うから。

明日の朝ご飯の献立を先生を考えるだけで、いいと思うから。

少なくとも——今は、まだ。